

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2007年2月

No. 43

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

2007年1月までの報告

- 9月～2007年1月 月1回、本の梱包作業とミーティング
- 9月 英語の本15753冊を南アへ出荷
- 9月 インターナショナルスクールより本70箱寄贈受ける
- 10月 ソエトのSOMOHOへサッカーボールを送る
- 12月 横浜中央移動図書館を南アのKZN州へ送る
- 2007年1月 TAAA 活動報告会
- 1月 八尾市より移動図書館車を引取る
- 1月 フリーステート州で移動図書館運行開始

内容

南アフリカの医療格差・教育格差（平林薫）	2
移動図書館車が動き始めた西ケープ州からの手紙（久我祐子）	4
平林薫からの写真通信	5
TAAAスタッフの自己紹介	6
TAAAと私 第4回（野田千香子）	8
作業の報告（西村裕子）	9
TAAA南ア活動報告会について（丸岡晶）	10
主な活動・ルイボスティ	11
寄付・会費・本などを下さった方々	12



3年生までは先生が移動図書館の本を選んでくれる。待ち遠しいな。

南アフリカの医療格差・教育格差

2007年1月8日の報告会より

TAAA 南アフリカ事務所代表

平林 薫

今、日本で問題となっている学校でのいじめと子供たちの自殺だが、南アでは、裸足で学校に来る子も制服のない子もいるし、何年か休学してから学校に来る子もいて、小学校でも生徒の年齢がまちまちだったりする。私が見る限り、互いにそれぞれの個性を受け入れ、尊重しているように感じられる。

ムルンギシ君の死と医療の格差

昨年5月に21歳で結核のために亡くなったムルンギシ君のお母さんは身分証明書もなく、子供の出生届もなかったため、子供の養育費を受けることができなかった。お母さんは住み込み家政婦の仕事で得る月6000円で一家四人を支えていたが、ムルンギシ君は高校の学費が払えず、退学させられた。やっと見つけた仕事が麻薬の売人で、警察に捕まり、刑務所で結核をうつされ、容態が悪くなると刑務所を追い出され、薬も栄養もとれず、吹きさらしの泥の家で大量の咯血をして亡くなった。翌日、彼の母校であったマンドシ小学校の校長先生と私が自宅を訪問すると、遺体はぼろぼろの毛布にくるまれ、冷たい地面に横たえられていた。彼は絵がうまく、礼儀正しい優秀な生徒だったと、校長は残念そうだった。その後TAAAはムルンギシ教育基金を立ち上げ、マンドシ小への支援を始めることになった。

地方の村には病院がないので、人々は具合が悪くなるとサンゴマと呼ばれる呪術師に診てもらう。サンゴマは人々から圧倒的な信頼を得ているが、やはり病気が重くなると対処するのが難しい。倒れたときには多くが手遅れとなる。治療したければ、高い医療費を払って私立病院か大都市の公立病院に行かなければならない。

昨年8月に、私が日本語を教えていたケティウエさんが28歳で亡くなった。彼女はいつも元気で、決して弱音をはくことのない聡明なアフリカ女性だった。前日お見舞いに行ったとき、水しか口に入らない状態だったが、点滴を打ってもらう姿を見ることはなかった。ひどく咳き込む患者もいる中でベッドはうなぎの寝床状態。病人に向かってぼそぼそのライスとカサカサの肉のカレーを“食べるの？ 食べないの？”と投げつける。彼女は病の床で、“薫さん、私、転院したいけどお金がないの”と言った。

南アには自費で宇宙旅行をするような若者もいれば、病気になっても薬も飲めない極度の貧困の中で亡くなっていく若者もいる。南ア社会の格差は私たちの想像を超えるものだ。



ムルンギシ君の妹デリシーレちゃん、少し元気になりました。

あまりに大きい教育の格差

アパルトヘイトの一番大きな罪は教育の差別だったのではないかと思う。もともと白人の子供しか入れなかった学校には日本の私立校並みかそれ以上の設備があり、高い水準の教育が受けられる。現在では人種に関わらずそのような学校に入れるが、学費が払えることが前提である。ダーバンのグレンウッド高校。公立の男子校で学費は年間26万円。黒人居住区の高校は年額約1万2千円。この差が教育の質の違いを

物語る。町の公立小学校は年額平均 14 万円で、黒人居住区では年額 1400 円。これも払えない家庭が多い。これではアパートヘイトが終わったとはいえない。経済的な格差が教育の不平等を生み、教育の格差が経済的な不平等につながるという悪循環を繰り返している。国や州は取り組んではいるが、手が回らないのが現実。

図書の地道な活動/ビルゲイツになりたい

南アの子供たちの多くは自分の本を持ったことがない。本を購入する余裕のない家庭に育ち、近くに図書館もなく、学校に図書室もない。読書の楽しさを味わうことなど到底できない。

TAAA のパートナーであるダーバンの教育支援 NGO の ELET は、黒人居住区や地方の学校の教師を対象に、本の使い方や簡単な分類などを指導するための研修の開催に取り組んできた。教師たちも本にアクセスできない環境で育ったため、図書室や本の利用の仕方がわからない。研修後、教室の片隅を利用したコーナーライブラリーを設置し、TAAA から送られる本が有効に活用されている。TAAA から本が届くと先生方は車を手配して本をもらいにやってくる。本にアクセスできるようになったのは数十校ではあるが、それらの学校の教師や生徒たちにとっては大きな変化であり、この地道な活動は、時間をかけて実を結ぶと信じている。



図書館車、大好き！ マンドシ小学校にて

マンドシ小には図書室も音楽室も図工室もない。しかし合唱コンクールでは小学校の部で全国大会にも出るし、アート作品の制作も行われている。前に TAAA の支援者の方々にお礼のカードを作ってくれたのもこの小学校だ。一般にアフリカ人は数字に弱いといわれるが、学校での算数教育の体制ができていないことが問題なのである。マンドシ小では TAAA から送られた算数セットを使って算数教育にも力を入れ始めている。

先日マンドシ小を訪問したとき、男の子がいかにも私に見せようとして目の前でバック転をしたり、逆立ちで歩いたりしていた。移動図書館車が帰るときには、石がごろごろしている道を裸足でものすごいスピードで追いかける。その時、この学校に運動場とマットを寄付できたら、いや、あの男の子を町に連れて行って陸上か体操の英才教育を受けさせることができれば、とずっと考えていた。支援してあげたいことが山ほどなのに、自分の力では何もできないのか、と限界を感じてしまう時がある。つくづくビルゲイツになりたいと思った。

貧困緩和の対策として、今南アフリカで注目されているのが、農業だ。コミュニティーで菜園を作れば、家族が食べられる。少し大きな規模で作れるようになれば売ることもできる。教師と生徒たちが農業の基礎を学ぶ。採れた野菜は給食に利用し、種はコミュニティーの人々に配布され、地域で家庭菜園を推進していくというもの。今年はぜひ学校菜園プロジェクトを実現させ、私も子供たちと一緒に野菜作りに挑戦したい。



学校菜園の収穫は給食に使い、余った野菜は販売する

移動図書館車が動き始めた西ケープ州からの手紙

久我 祐子

昨年、ケープタウン近郊の貧困地域カエリチャで念願の移動図書館プロジェクトが運行開始となりました。プロジェクトを指揮するリンさんは、西ケープ州での移動図書館車プロジェクト全般を総括するローズさんと一緒に、ブレデンダールでの移動図書館車プロジェクトを視察に行き、視察記を送っていただきました。

西ケープ州移動図書館担当責任者 リンさんからの手紙

「TAAAの皆さんの南アフリカに対する多大なるご支援に対し、改めてお礼を申し上げます。小型バスの問題についてのご理解、そして将来2台目のバスは2ドアのものを送って下さるとのご提案、とても嬉しく思います。ドアは、入口用と出口用がある方が、教師や生徒たちにより効率的に貸出ができます。2007年にはそのようなバスが到着することを楽しみにしています。

3ヶ月前にローズと私は『ブレデンダール移動図書館車プロジェクト』を訪問しました。クローマー小学校で、学区区マネージャー、校長、教師たちが主催する四半期プロジェクト会議に出席させていただきました。その席で、プロジェクトの図書アシスタントに会い、次の日には彼女と一緒に移動図書館車で3つの学校を訪問し、教師や生徒との交流を見学しました。

ブレデンダールのバスは、このままこの土地で運行されるべきだと思いました。このプロジェクトは、優れたサービスを提供しています。プロジェクトに従事している人たちも熱心で、生徒の読解力向上に懸命に取り組んでいます。

今後EDULISは、他の地域に対する支援と同様の支援をブレデンダールのプロジェクトに対しても施すようになるので、これから益々成長していくことでしょう。EDULISは、2006/2007年度のブレデンダールを対象に5万ランド(100万円)分の本を注文しています。支援対象校も増えていました。四半期会議では、今後蔵書が増えれば、さらに対象校を増やしていくことが決まりました。2006年には、図書アシスタントが、地元の大学で「学校図書館作業トレーニングコース」を受講しました。彼女は仕事に対する自信が付いたといっていました。2007年初期には、教師コーディネーターおよびEDULIS職員もトレーニング・コースに参加させることが決定しました。

このように、年末に前向きな情報を提供できることをとても嬉しく思います。 リン 」

都市部のカエリチャ、農園地のブレデンダール。それぞれ地域の特徴は異なっていますが、アパルトヘイト政策によってあまりにも長い間教育や生活基盤がネグレクトされていた、という共通の深刻な問題を抱えています。両地域の移動図書館車プロジェクトの担当者が、活発に交流し情報やノウハウを交換し、刺激しあい応援しあうことは、とても効果的だと思います。

リンさんは、頻りに地元の様子がよく分かるメールを送ってくれます。リンさんに今年2台目のバスを送ることを示唆したところ、「すぐに送ってくれ」と飛びつくことなく、「そのうち必要になったら」と、まずは今あるバスでプロジェクトを充実させていこうと、堅実な考えが返ってきました。「寄贈したバスを大切に使っている」と頼もしく思いました。TAAAは、カエリチャのように、政府であれNGOであれ、地元のニーズを丁寧にくみ取り、ニーズのペースに合わせた地に着いたプロジェクトを応援していきたいと思っています。

南アは、アパルトヘイト時代が長かったこともあり、開発分野で海外支援に長年頼ってきました。海外の援助機関に主導権を握られていたことも多々あったと思います。しかし、これからは、カエリチャのリンさんのような教育を受けた心あるエリートたちが、開発分野で、地元と密着して、草の根で南アをリードして欲しい。「海外援助はストラタジーの一環として利用するけど、意志決定者はあくまでも自分たちなのだ」という気概で、根深い教育問題やエイズ対策等に住民と手を取り合ってチャレンジして欲しい。このような頼もしいリーダーたちにとって、TAAAのように遠い日本からエールを送り続ける団体がいることは、心強いことだと思います。TAAAの魅力は「応援力」と私たちが自負できるように、これからも南アのレシピエントをうまくサポートしていきたいと思っています。主役はあくまでも彼らです。

平林薫からの写真通信

マンドシ小学校には、移動図書館車も来ています。そしてまた、TAAA の長年のパートナー団体である ELET が学校菜園を指導し、成功させています。TAAA では ELET と協力してドウェドウェ地域の20校に学校菜園プロジェクトを広げようとしています。上2枚はイナンダ地区の学校菜園イベントにて。

未来のファーマー



大収穫 (右は ELET の代表マーヴィン・オグル)



まだ学校菜園のないタタクサ小ではジャガイモしか入っていないシチュウの給食



マンドシ小学校では学校菜園で採れた人参や玉ねぎなどの入ったシチュウの給食です。



成功した学校菜園



トイレから見下ろしたマンドシ小学校



TAAA スタッフの自己紹介です。(アイウエオ順)

浅見克則: もうこの会のメンバーとして10数年の年月が経ちました。本の集荷と図書館車の移動が主な任務です。20Kgの段ボールが持てなくなると存在感が薄れるので、日夜鉄アレイで筋トレに励む毎日です。

北爪 健一: 私が TAAA と関わりを持ち始めたのは平成7年からです。定例の梱包作業へは、土日勤務の都合、季節的な農事、地元の行事など制約が多く出席回数が少なく申し訳なく思っているこの頃です。作業量が少ない分、図書館車情報を収集して良質な車が提供できるよう努めます。(埼玉県立浦和図書館勤務 58歳)



後左から西村、丸岡、齋藤、常見、坂本、前列、浅見、平林、米山、野田
2007年1月8日 TAAA 新年会にて(齋藤さんは AJF 事務局長です)

久我祐子: 1994年の総選挙でマンデラ大統領率いる新しい南アフリカが産声を上げた時、「これからは開発だ。特に教育支援を是非頼むよ」と、

当時東京で事務所を構えていた ANC 代表に肩をたたかれました。その言葉に押されながら、TAAA の活動に細々とですが関わるようになりはや13年。未だに私達の活動が現地で大歓迎されている事に対して、嬉しい反面、愕然ともします。「今もなお、取り残されている人達、教育がネグレクトされている地域がこれほど多いのか」と。想像を絶する忍耐力で耐え続けている「取り残された大多数の人達」に対して、バス、本、資金などの目に見える支援とともに、「私達は今でも日本で応援し続けているよ」とエールを送り続けていきたいと思っています。

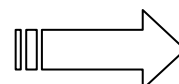
近藤信幸: 学生時代から貧困や内戦やエイズといったアフリカ問題に興味があり、勉強していました。それでは飽き足らなくなり、実際にアフリカと関わるような活動をしたいと思ったのが、TAAAと出会うきっかけでした。TAAAは10年以上も地道に活動を続けています。このTAAAの持つ「継続する」という姿勢は最も大切なことのひとつです。私自身も継続してアフリカ問題に関わっていききたいと思います。(大学院生)

下谷房道: 何かを吸収して自分のものにできることは素晴らしい。その意味で読書は食事にも比すべき価値がある。一冊の本を読み終えた時の満ち足りた気分は満腹感にも勝るものだろう。南アで見た黒人の先生方のTAAAが贈った本を大切に持ち帰る姿。自分もできるだけ図書館に足を運ぼうと思い、図書館の近くに引っ越した。借りてきた本を抱えながら帰るとき、同じだなとふと可笑しくなる。私も教員である。日本の教育問題にからめとられながら南ア、世界のことに関わり続けていきたいと願っている。

関根章博: 2003年に会社を辞めて自営業になったのをきっかけに入会しました。自営業は自ら事業を創り出すことができます。どうしたら世の中に良い方向に影響を与えられるのか？ボランティア活動を通してそれを学びつつ、また本業自体も世の中に貢献できる仕事にしていきたいと考えています。現在は自分の環境に無理なく、お手伝いできるときに参加させていただいています。

武山理絵: 昨夏から参加しています。本の整理中、大好きだった絵本とそこから得た喜びを誰かに継いでほしくて、引き受け先を探したのが会との出会いでした。折角だから読んでくれる子供のことを知りたいと直接本を持参したら、自然体で気さくな、志ある雰囲気心地よくて定着した次第。「ほんの出来心で」一度いらしてみませんか？

ボランティア募集中！こちらに案内があります



常見佳代: スペイン語の児童書 10 冊を、パナマ先住民地域の小さな地域センターに寄贈したことがある。協力隊での仕事は現金収入向上の支援だったが、そこを去る時、未来を切り開く「本」と「子ども」の可能性に小さな夢を託したかったのかもしれない。そんな記憶も遠くなった昨年、縁あって梱包作業に参加している。夫を通して南アで知った TAAA の活動。偶然にも野田代表の家は、実家の近くであった。南アに必要なものは多いが、今後も日本と南アの協力者の資源や領域を活かせる支援が、地道に進むことを期待する。

西村裕子: 参加のキッカケは「窓際のトットちゃん」。これまで14回読んでいる本！6年前、黒柳徹子さんの講演で子供達のスライドを見た。何かグズーンと心に来て、翌日図書館でNGOの本を借り「子供」をキーワードに探したら、TAAAを見つけた！「トットちゃん」の本は何度読んでもワクワクするページや毎回涙が出るページもある。読んだ後も、また読むのですぐ近くに置いておく。南アの子達も、そんな本に出会えれば、TAAAの作業は楽しいから大好き！あ、63年生まれです。(昭和じゃなくて西暦だけど..)

野田千香子: 南アフリカ共和国は私にとって、思い入れの深い国です。自由への抑圧、不平等の極地とも言えるアパルトヘイトの戦いの中から、珠玉のような和解の国が生まれました。自由を求めながら、途上で犠牲となった多くの方々のためにも、南アの人たちが格差のない真の自由と平等を得る、そのお手伝いが少しでもできれば、本望だと思っています。日本からできるわずかな事を続けて15年になってしまいました。

平林薫: 南ア事務所の平林薫です。早いもので南アに住んで 10 年になりました。日本にいた時からアフリカタイムだったので、居心地は最高。いまやすっかり南ア人です。海沿いのダーバンに移り、念願だったサーフィンの活動も始めています。これからの活動の抱負としては、学校やコミュニティをもっと頻繁に訪問して、人々や子供たちとのつながりを深め、“顔の見える支援”をしていきたいと思っています。筆不精なのですが、現地レポートもできるだけまめにお届けするようがんばります。

丸岡晶: もともと国際協力に興味があり、さいたま市に住んでいたことから 2003 年 9 月に入会しました。現在は引越してしまったため、ほとんど活動しておりませんが、イベントの告知などでささやかながら協力させて頂いております。また、当会のほか、シャンティ国際ボランティア会、JENの会員になっており、今後も少しずつ幅広く活動していきたいと考えています。世界から少しでも貧困をなくしていくことが私の人生の課題です。(会社員、31 歳、千葉県在住)

武藤豊: 昨年2006年は皆様のご協力で多くの図書館車や本が南アフリカに来ました。皆様の気持ちをしっかりと受け止め、当地で如何に効果的に利用できるか、南アフリカのカウンターパートと共に移動図書館車プロジェクトを推進及び発展することが私の2007年の使命です。(ダーバン在住)

山下八千穂: きっかけは今から5年前、TAAAに入会すれば大好きなアフリカ旅行ができるのではないかという不純な動機でした。一昨年、憧れの南アへ、平林現地代表及び彼女の友人達と 2ヶ所の学校訪問が実現しました。多忙のため、会へは年に数回しか出席できませんが、いつもお力になって下さる皆様や、たまですが行けば温かく迎えてくれるメンバーの方々に心より御礼を申し上げます。

米山周作: 高校で英語の教員をしています。昨年8月に南アを訪れ、移動図書館車への乗車、学校訪問、ソウエトでのホームステイ等、大変貴重な経験をさせていただきました。昨年3月にTAAAに入会したばかりで、NGO活動も南アのことも勉強を始めたばかりの素人ですが、今後も長く無理なく南アの教育支援を行っていききたいと思っています。よろしく願いいたします。

TAAAの活動は休日やフリータイムに時間を使って下さる方のご協力によって成り立っています。一日に数時間、月に数時間、数ヶ月に数時間..いろいろな関わり方をされる方の力で行なわれています。年齢、職業もまちまちです。関心をお持ちの方はご連絡を下さるよう、お願いいたします。

TAAAと私

第4回

(1994年)

野田 千香子

選挙直前の南ア訪問

1994年3月末、TAAAが設立されてから、ちょうど2年後にはじめての南アフリカ共和国への訪問が実現した。

4月末の歴史上初の全人種参加の総選挙を控えて、極度の緊張と熱気を内にこめて、この先の“大変化”を全ての人が待っていた。世界の耳目も集まっていた。良くも悪くも“大変化”が南アにおきることは誰の目にも明らかだった。

ヨハネスブルグの目抜き通りでは人種間の抗争が起き、流血の惨事となっていた。

ANC 党が勝利し、アパルトヘイトがいよいよ正式に終わるだろうと予想される選挙ではあっても、その後、白人はどうなる、アパルトヘイト法の下で黒人を傷めつけた人たちはどうなる、報復はあるのか、黒人間の利権はどうなる、奪われた土地はどうなる・・・。ピリピリした空気の中で、私たちの南ア滞在中の新聞の一面トップには、路上に流された血のカラー写真があった。地方都市ダーバン郊外でも、訪問するはずだった本配布先の学校の教員宅に前日、銃弾が打ち込まれたのを現地 NGO が配慮して、インド系の学校訪問に切り替えたのであった。ニュースになるような抗争の場は限られていて、他の場所では穏やかな日常生活が行われていた。

はじめて南ア空港に降り立つ

埼玉県立高校の社会科の教員である下谷房道さんと私が初めて南アの空港に降り立ったのは、早朝6時だった。空港には、南アの教育 NGO、MEI (メソジスト教育イニシアティブ) の代表のデイヴ・ベントレイが



迎えに来ているはずだった。乗客は急ぎ足で去って行く。下谷さんと私が残された。少し先の方に、ひげを生やし、薄いサングラスをした大きな白人の男性がひとりこちらを見ていた。「あ、ベントレイさんだ！」ベントレイさんははにかんだような笑みを浮かべてやっと近づいてきた。当時、日本人の乗客はほとんどいないのですぐ私たちを識別できたと思うのに、慎み深い人だな、思った。ベントレイさんのこの人柄は10数年たっても変わらない。

小さな教会 (写真上) で本を分ける

ヨハネスブルグから車で30分の彼の家へ。広い並木道に、一軒3百~5百坪の屋敷町。これが平均的な白人の住宅地である。下谷さんと私は親子4人家族のこの家に数泊させてもらった。

数ヶ月前にベントレイさんに送った本のダンボールがガレージの壁際にうずたかく積まれていた。「明日は教会に運んで学校の先生たちに分けよう」とベントレイさんは言い、私たちは毎日新聞南ア支局長の福井聡さんに電話をした。配布の現場に取材にきてくれると言う。

ベントレイさんの住むベノニ市に隣接するデベトンはアパルトヘイトのもとではタウンシップ (黒人居住区) とされていた。今も同じように黒人のアフリカ人が住んでいるが、ベノニ市に合併されている。ベントレイさんは会社員として働く余暇にこのデベトン地区で教育の支援を1992年から始めていた。図らずも TAAA が日本で、南アを支援し始めたのと同じ時期であり、皆が仕事を持ちながら、ボランティア活動としてやっているという状況も似ていた。

この小さな教会は当時、別々の行政区であったベノニ市とデベトンの境界にあり、白人も黒人も、来ていた。ベントレイさん一家はベノニ市の数百人の教会 (←デベトン小学校でも人気の下谷先生)

1月14日(日) 作業の報告

西村裕子

今日の作業は、ソトコトという雑誌の取材と作業風景の撮影のため、集合となった。今、ブームになっている「ロハス」を提案する、心がリッチになる雑誌の取材。「いつも寒い日には、ダンボールを敷いた上に座って作業してるけど、今日はやめておこうかな・・・」なんて思ったり・・・

なんと、平林さんとソトコト編集チームの方達は、埼京線で向かい合った席に座っていたようだ。南与野駅で降り、何となく同じ方向に歩き始め、同じ場所にたどり着いたという、何とも面白いスタート。

ソトコトさん達は、パッキングのお手伝いもしてくださった。ご指導は、もちろん浅見副代表。「私くらいになると、量らなくても重さが分かるんですよ」量ってみたら、予想と4キロも違っていた・・・でも、それは、みんなに笑いを振りまいて下さる浅見さんの心のこもった演出！（きっとそうですね！）そんなことも記事になっていたら、おもしろいなあ。

最後に集合写真を7～8枚撮って終了。「自然な感じに・・・」のリクエストにうまく応えられたかな？平林さんの帰国前に取材を受けることが出来たのは、とてもいいチャンスだった。野田さん・浅見さん・平林さんへのインタビューに、ソトコト流のエッセンスが加わって誌面に登場するのでしょうか。全ては、2月5日発売（もうすぐですよ）のソトコトをお楽しみに～！

今日は新しい方がお二人参加されたので、午後のミーティングも久々に自己紹介をし、新年にふさわしいスタートとなった。13日(土)には、浅見さんが大阪より移動図書館車を引き取って下さいました。すぐにエンジンがかからず、ずいぶんとご苦労されたそうです。そして、13時間という長距離の運転。ご自宅に戻られたのは、深夜となり、大変お疲れ様でございました。翌日は、ごゆっくりする間もなく、作業でしたから、大変でしたね。浅見さんのご苦労のお陰で、移動図書館車を譲って頂くことができますのですね。

そして、米山さんが勤務される学習院高等部様より、ムルンギシクンの基金とTAAAにご寄付を頂きました。秋の文化祭で、生徒さんたちが出店したお店の売り上げを寄付してくださったものです。午前中は、生徒さんのクラブ活動を監督されて、マラソン(フル?)を終えてから、参加していただきました。お疲れ様でした。

皆さん、今年も楽しいTAAAで行きましょう！よろしく願いいたします。

参加された方：野田さん・浅見さん・平林さん・島田さん・下谷さん・武山さん・秋野さん・坂本慰子さん（先週の報告会に来てくださった方です）・米山さん・西村の10名でした。

(前頁より)

(木の下もいい。送った本を使ってトムソーヤの授業→)

員を持つ白人の教会員に属していたが、隔週の日曜日にここへ来ていた。

本の配布はこの小さな教会で行なわれた。椅子、机を片付けて、ダンボールから出した本を床に20くらいずつの山にした。落ち葉炊きの準備ができたように見えた。次々に黒人の先生たちが車でやって来た。ベントレイさんが私たちを紹介し、私も「先生や生徒さんたちが利用して下さればうれしい」と挨拶した。「どれでも好きな山を持って帰ってください」とベントレイさんが大声で言う。毎日新聞の福井さんが駆けつけてきて、写真を撮ったり、インタビューをした。

ベントレイさんはこの後、さらに貧しい隣のエトワトワ地区のバラックのひしめく住宅地に連れて行って



くれた。本を利用する子どもたちの住んでいる地区だ。私たちはレンガでできた学校や納屋を利用した机も黒板もないような学校をたくさん回った。(つづく)

TAAA南ア活動報告会について

丸岡 晶

1月8日の午後2時から、定例報告会が開催されました。今回は南ア事務所代表の平林さんに加え、昨年8月に南アを訪問された会員の米山さんからフレッシュな報告がありました。



平林さんの報告を聞く(手前が筆者)

相変わらず南アの状況は厳しく、やはり教育格差が経済格差につながり、またそれが教育格差につながるという悪循環が続いています。そのような中、何千のうち数十校ではありますが、TAAAが贈った本と移動図書館車は確かに子どもたちの糧となっています。

これを受けて第2部では、2つのグループに分かれてフリーディスカッションをしました。「現地の要望に1つ1つ応えていくことが大切」「医療など南アのシステムを根本的に

変えていく必要があるかもしれない」「ワールドカップを契機に影の部分に光を当てられるか」「崩壊や暴動が起こってもおかしくない状況」など様々な意見が出ました。

今回は西村さんのてきぱきとした司会で、なんと！時間ぴったりに終わりました。また、久我さんからルイボスティの説明、浅見さんから移動図書館車の報告、アフリカ日本協議会(AFJ)・斎藤さんからAFJの説明などがありました。出席者は20名。懇親会は新年会となり、ゆっくりお話することができました。21時にお開きとなりました。



グループ討議の発表を聞く



南ア訪問の報告をする米山さん

写真撮影: 浅見克則

◆ 主な活動 (2006年9月16日～2007年1月15日) 下線は南アにおける活動

9/18～19 JICA 視察訪問団とンドウエドゥエやELETな
どを訪問案内 平林薫

9/20 TAAA 南ア事務所代表平林薫 南アより日本へ

9.21 会議とアフリカ日本協議会 (AJF) 訪問
野田千香子 平林

9/2 SAPESE の蓮沼忠さん、日本へ戻る

9/23 セントメリーインターナショナルスクールから
70箱の本を引取る 浅見克則 西村裕子 野田

9/23 蓮沼さんと会合 野田 浅見 北爪 久我祐子

9/18～10/1 会報4 2号編集・校正 野田 西村

10/3 平林、南アへ戻る

10/5 VIVAFREAK (ミニコミ誌) の取材を受ける 野田

10/8 作業と会議 浅見 北爪健一 下谷房道 西村
会報発送作業 浅見 北爪 西村 野田
大久保ふみ

10/10 会報4 2号をホームページへ掲載 近藤信幸

10/10 ソエトのSOMOHOへサッカーボールを送る 野田

10/14 柏市移動図書館車を駐車場 (吉澤怜子さん宅)
へ移動 浅見 野田

10/16 KZN 州マンド小学校を訪問 平林

10/16 蓮沼さん、南アへ戻る

10/17, 19 MEI にて、READ 財団と図書トレーニング
蓮沼さん

10/18 フリーステート州移動図書館担当者11人が
MEI を訪問

10/21 野尻NLAより本引取り 浅見

10/23 TAAA は、移動図書館運行開始を確認しつつ、車
を送付していく旨のメールを南ア各地の図書教育
担当部署に送る。

10/28 KZN 州教育省にて Mariana と会議 武藤豊

10/29 都民教会 (下北沢) のバザーへ
丸岡晶 久我祐子 野田

11/1 平林、南アより日本へ

11/3～4 学習院高等科チャリティー販売 米山

11/6 ひろしま・祈りの石国際協力教育財団の田口さん
を訪ねる 野田 浅見

11/12 会議 野田 浅見

11/16 南アの受け取り先に未運行車について四半期ご
との報告書書式を送る 久我

11/23 西ケープ州で運行計画会議 蓮沼さん

11/26 作業と会議 西村 野田 浅見 米山周作
山下八千穂 下谷 常見佳代

12/1 KZN 州教育省訪問 蓮沼さん

12/3 保管中の移動図書館車5台の始動チェック
浅見

12/4 ハウテン州担当責任者と会議 蓮沼さん

12/8 埼玉県国際交流協会へ報告書提出 野田

12/9 アフリカ日本協議会 (AJF) 集い 平林 野田

12/11 JICA 委託事業申請打ち合わせ会議 JICA にて
平林 野田 武山理絵
会議 平林 野田

12/16 報告会お知らせラベル準備 西村

12/17 作業と会議と忘年会 西村 浅見 野田 久我
平林 米山 関根章博 武山 常見

12/20 1月のTAAA 報告会のリリース 丸岡

12/27 南ア教育大臣より、各州教育省トップへ移動図
書館活用促進の手紙がファックスされる

12/28 会計実務 西村

12/31 横浜市中央図書館車をKZN 州へ出荷手配 浅見
野田

1/5 読売新聞がTAAA 報告会の案内掲載

1/5 会計と編集会議 西村 野田

1/7 TAAA 活動報告会 北浦和にて

講師 平林 米山

1/17 TAAA 新年会 AJF より斎藤龍一郎さん参加

1/13 大阪府八尾市図書館車引取り 金子光子さん宅
に運ぶ 浅見

1/13 KEL の藤さんと打ち合わせ会議 (寄付について)
関根

1/14 作業と会議 「ソトコト」誌から作業に参加。取
材を受ける。(2月5日発行3月号に掲載)

平林 野田 西村 島田勝 浅見 武山
秋野和泉 下谷 米山 坂本慰子

1/14 学習院高等科よりチャリティー収益をダーバン
郊外の小学校へTAAA を通じていただく。

(1/20 平林、南アへ戻る)

ルイボスティのご紹介

南アフリカの西ケープ州だけに取れる健康茶ルイボスティをご購入いただきますと、売上の一部がTAAAに寄付されます。ノンカフェインですので、赤ちゃんから、高齢の方まで、召し上がっていただけます。

1箱 80パック 2000円(送料一律500円)
(5箱以上 送料無料)

1パックでヤカン一杯のお茶が飲めます。

お申込みは、P12 のTAAA連絡先へ